

古代ギリシアの「巡礼」—エレウシスの秘儀入信を中心に

齋藤 貴弘（愛媛大学法文学部准教授）

"Pilgrimage" of ancient Greece: a case of the Eleusinian Mysteries

Takahiro SAITO

Associate Professor, Faculty of Laws and Letters, Ehime University

There were four so-called ancient Greek "pilgrimages" which were based on Panhellenic sanctuaries, namely; participation to the Olympian festival games and sending delegates, counseling oracles (e.g. Delphi), visiting and staying at sanctuaries of gods of healing, such as Asklepios, and being initiated into the Eleusinian Mysteries. However, it is still argued whether these religious activities of ancient Greek polytheism should be considered as "pilgrimages" like the ones of monotheism such as in Christianity and Islam. Paying attention to this basic methodological problem, in this paper the author focused on the Eleusinian Mysteries in perspective of "pilgrimage" and presented four characteristic points of this "pilgrimage" as following: 1) the fixed period with two ritual stages: the Greater Mysteries (month of Boedromion 15th-23th, in early autumn) with preliminary rites of the Lesser Mysteries which were held seven months earlier, 2) the openness of initiates including women and slaves, 3) the individual and private character in comparison with general communal character of ancient Greek religion, 4) a single-type pilgrimage route along the holy road called "hiera hodos" from the city of Athens to the sanctuary of Eleusis where it was possible to obtain a higher status by repeating the journey.

I. はじめに

古代ギリシアにおいて「都市国家」ポリスという共同体が誕生したのは、前8世紀のことである。ギリシア人は、まとまって一つのクニを形成することなく、非常に小さな都市国家ポリスが独立国家として多数、存在していた。特に前8世紀半ばから約200年間は大植民時代と呼ばれ、植民ポリスの建設を通じて地中海全域にギリシア人が広がった時代であった。

地中海中に拡散する過程においてギリシア人は、自らをヘレネス、他民族をバルバロイとしてアイデンティティを確立させ、そして、ポリスを越えて「全ギリシア人共有の」神域として登場したのがパンヘレニックな神域であり、そこで開催される祭典や諸儀礼であった。

代表的パンヘレニックな神域・祭礼としては、

- 1) オリュンピアを始めとする四大祭典（他ピュティア、ネメア、イストミア）
- 2) デルフォイを始めとする神託伺い（他ドドナなど）
- 3) 治癒神の聖所への傷病快癒祈願の参詣（エピダウロスのアスクレピエイオンなど）¹
- 4) エレウシスへの秘儀入信

といったものが挙げられる。これらのパンヘレニックな神域への参詣やそこでの祭祀参加のために地中海中からギリシア人が移動する現象をもって、西洋古代史における「巡礼」と見なされている²。今回はエレウシスの秘儀入信について、概略とともに「巡礼」としての側面から若干の考察を加えてみたい。

II. 古代ギリシア世界における「巡礼」

近年、西洋古代史においても「巡礼」pilgrimageは着目されている研究テーマの一つとなっている³。本稿も「世界の巡礼」の一環として古代ギリシアの「巡礼」を取り扱うが、今一度「巡礼」概念について確認をしておきたい⁴。「巡礼」の定義、すなわち何をもって「巡礼」と見做すのかの問題を巡っては、これまでにも議論がなされてきた。そして、大勢としては先に挙げたようなパンヘレニックな祭典や儀礼への参加といつ

た行為が、「巡礼」と見なされている。例えば、古代ギリシア「巡礼」研究の先駆と言えるディロンは、古代ギリシアに「巡礼」に相当する語の不在を指摘しつつ、「巡礼」の定義として、'Pilgrimage – that is, paying a visit to a sacred site outside the boundaries of one's own physical environment – was clearly important as a cultural phenomenon amongst the Greeks' と述べる⁵。ここでは、その宗教的実践の内実や、より原義的な問題として、キリスト教やイスラム教といった一神教と古代ギリシアのいわゆる「多神教」という宗教体系との根本的な相違については捨象され、聖地への移動という外形的な行為に基いて評価されている。こうした方法論的視座には依然、留意すべきだと思われる。

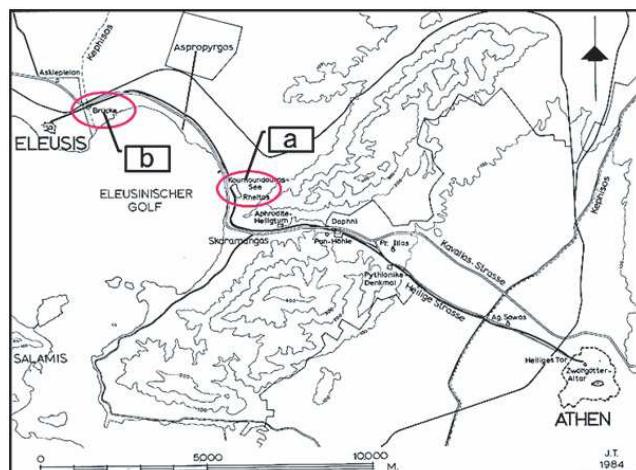
事実、「多神教」polytheismという概念さえ、自らの信仰体系を一神教monotheismと自認するユダヤ・キリスト教的立場から時系列的には先行する他者たるギリシア・ローマの宗教に対して事後的に張り付けられたレッテルに過ぎない⁶。古代ギリシア人には「宗教」religionを表す概念自体が存在せず、自らの信仰実践を「多神教」という体系で自認していた訳ではなかった⁷。そもそも彼らにとっては、神々の存在、神と人との関係ありきであって、彼らを取り巻くその環境・体系そのものを包括的に概念化して名付ける必要性自体が欠如していた世界であった。このことを踏まえれば、一神教と「多神教」の差異は、単なる「一」と「多」の対照性以上に次元の異なる問題を孕むことを付言しておきたい。

こうした懷疑は、近年、活気づいてきている古代ギリシア・ローマ「巡礼」研究内部からも発せられている⁸。デルフォイの研究などで知られる Scott Scullionは、古代ギリシア・ローマの「巡礼」を扱った論集に収録された論稿の中で、「編集者の寛容性をもって」まさに、こうした一神教と「多神教」の枠組みを軽視する「巡礼」研究の方法論的問題について、正面から疑義を唱えている⁹。本稿においてもエレウシスの秘儀入信を「巡礼」という枠組みの中に指定しつつも、最終的には、むしろ一神教的巡礼活動との差異を考察していくための手掛かりとして、その特徴を検討してみたい¹⁰。

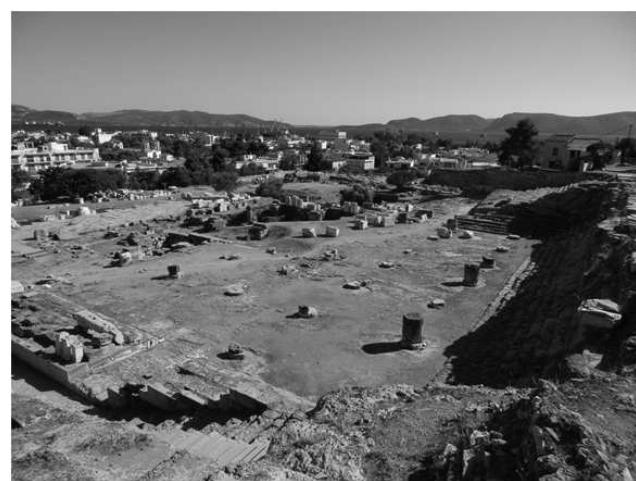
III. エレウシスの神域

エレウシスとはアテナイ中心市から西方20キロほどに位置する穀物神デメテルと娘神ペルセポネ（単に「娘」コレーとも呼ばれる）の神域であり、その間が「聖道」ヒエラ・ホドスで結ばれている（地図）。入信者たちは、入信儀礼の最終段階を中心市からこの「聖道」を行進してエレウシスに赴き、そこで秘儀を授かった。現在でも、古代の「聖道」におおよそ沿った形で幹線道IEPA ΟΔΟΣが走っている。

考古学的調査によれば、その起源はポリス以前のミュケナイ時代末期にまで遡る。のちにテレスティリオン〔秘儀堂〕の建てられる位置にはこの時代に建造物メガロンBが建っており、詳細は不明だが、既に何かしらの宗教的機能を備えていたとされる¹¹。その後、前8世紀以降ポリス時代を迎えるが、当初エレウシスとアテナイはそれぞれ独立の共同体であり、前7～6世紀頃にアテナイに併合されたと考えられている¹²。また、この頃、美術様式で言うところの初期アルカイック時代には、アッティカで墓域を形成していたケラメイコス地区でも「聖道」沿いのエリダノス河南岸地域が特権的な場所として好まれ墓群が集中するという¹³。他方で、アテナイ中心市にはエレウシスの聖所と対をなす拠点としてアゴラの南東、アクロポリスとの間に「中心市のエレウシニオン」が建てられた¹⁴。



アテナイ中心からエレウシス (J.Travlos, Bildlexikon zur Topographie des Antiken Attika, Tübingen, 1988, 181に加筆・補正)



エレウシス遺跡 テレスティリオン (著者撮影)

テレスティオンも次第に拡張され、ペリクレス時代の拡張を経て、3000人が収容可能と言われる¹⁵。その後、エレウシスとその秘儀はアテナイ国家祭祀として非常に重要な役割を果たしつつ、前4世紀後半にはオリュンピア祭に次ぐギリシアの最も有名な祭儀にまで発展した。ヘレニズム時代以降、衰微の傾向が見られるが、後2世紀、いわゆる「五賢帝時代」のローマ帝国下で再興し、ハドリアヌスやマルクス・アウレliusといった皇帝も入信した。しかし、ローマ帝国がキリスト教世界へと変貌していく過程でキリスト教聖職者の攻撃対象となり、380年の異教禁止令によって衰退し、395年にはゴート族の侵入と破壊を蒙って神域の活動に幕が閉じられた。

IV. 秘儀の目的とギリシア人の死生観

エレウシスの秘儀に与る目的は、死後の安寧を得るためにいたと言われる¹⁶。これが具体的にどういったことであったのかは秘儀という性格上よく分かっていないため、翻ってギリシア人の一般的な死生観から、秘儀に授かる魅力を浮かび上がらせてみたい。ホメロスや悲劇などの文学作品を参考に概要を描くとすれば、絶対的な不死なる神々の存在と比して、死すべき運命を負った人間は地上においても「空虚な影」のように儂い存在である一方、死後、冥界にあっては影のような亡靈となると考えられていた¹⁷。こうした現世にも死後にも何の希望もない悲壯的にも思われるギリシア人の死生観にあって、希望を与えたのがエレウシスの秘儀であった。

「幸いなるかな、地上にある人間の身にしてこれを見し者は。
密儀を明かされず、祭儀に与ることなき者は、死して後
暗く湿った闇の世界で、これと同じ運命を享けることはかなわぬ。」
「デメテル讃歌」（讃歌第2番）480—482行¹⁸

秘儀入信者は普通の死者と異なり、よりよい世界で過ごせたことが示唆されている。さらに次の喜劇の一節は、秘儀入信者の死後の様子を垣間見せる。

「その次に笛の音が風に漂いお前を包む、
そして美しい光を見るだろう。ちょうどこの世のような。
それからミルトの木立、ついで幸多き男女の群れと賑わしい手拍子の音。」
ディオニュソス「この人たちはいったい誰だね。」
ヘラクレス「秘教入会者だ。」アリストファネス『蛙』154—158行¹⁹

冥界下りの途中で見かけるエレウシス入信者たちの様子を描写した場面である。興味深いのは、薄暗い死後の世界にあっても「美しい光」に包まれる入信者たちだが、その光が「この世 *ένθάδε* のような」と譬えられていることだ。加えて、借用した訳語では判りにくいが、ここでの「美しい」にはギリシア語カロス *καλός* の最上級 *καλλιστον* が使われている。儂い現世ではあるが、良くも悪くも人間に唯一生きる場として与えられた「この世」、すなわち地上の世界を貴ぶ—そのような意味で古代ギリシア人は極めて「現世主義」であったと言えるだろう。

V. 起源神話

何故エレウシスの神域が死後の安寧を授ける秘儀と関係があるのかについて、『ホメロス風讃歌』の一つである「デメテル讃歌」を下敷きに概略を示せば、以下のようになる。

ある時、冥界の王ハデスが大地を割って現れペルセポネを妻とするべく攫って行く。娘のいないことに気づいたデメテルは老婆の姿に身をやつして方々を探し回るものを見つけられず、悲嘆にくれてエレウシスの地に辿り着く。そこでたまたま彼女を見かけたエレウシス家の者が憐れんで家に招き入れて歓待した。その間も彼女はベールを被りうなだれたまま沈黙を続けていたが、悲痛な面持ちの彼女を和ませようとしたイアンベの冗談に、ついにデメテルも笑みをこぼらせた。

意気消沈した穀物神デメテルに同調して地上の植物は活動を停止したため、人間たちは困窮し、この事態に天上の神々も憂慮した。これを受けてゼウスは、ペルセポネを再び母の許に返すべくハデスに使いを遣つ

た。ハデスは承服したものの、一計案じてペルセポネに冥界の食べ物である柘榴を一粒食べさせた。このため彼女は完全に冥界と縁を切ることは出来ず、地上に戻った後も一年の三分の一は冥界でハデスの妻として暮らすこととなった。これは、彼女が冥界で暮らし、母デメテルが消沈している時期には植物も活動を停滞させる季節—すなわち冬となり、ペルセポネが地上で母と共に過ごす間は植物も活動する季節—春から秋となる、という植物の活動サイクル「四季」成立の起源譚ともなっている²⁰。

娘と再会を果たした後、デメテルはエレウシス王家に感謝し、二つの賜物を受けた。一つは穀物（麦）であり、この賜物を世界中に広めた故、エレウシスは農耕発祥の地とされた。そして、もう一つが娘ペルセポネの冥界下りと地上への復帰に象徴される「死と再生」のシンボリズムに関わる秘儀の伝授であった。後にアテナイは、この事績を他のギリシア人に向けて喧伝した。事実、アテナイは、この伝承に基づきデロス同盟諸市に対して、エレウシス（すなわちアテナイ）へ小麦と大麦の初穂奉納を義務付け、更には、その他の諸都市にも同様に初穂奉納を奨励する民会決議を行っている²¹。

VII. エレウシスの秘儀

a) 入信資格・義務

入信資格は非常に開かれたもので、殺人の穢れがなく、ギリシア語が話せれば、女性でも奴隸でも入信が可能であった²²。但し、小秘儀（2/3月頃）・大秘儀（9/10月頃）とを合わせ諸経費として15 ドラクマの入信料が必要とされた²³。小秘儀に関しては任意参加であったらしい²⁴。ギリシア各地から約半年の期間をおいて入信希望者がアテナイを2度来訪する負担への配慮かも知れない。

入信希望者には入信後に一つのタブーが課せられた。まさしく秘儀の名の如く、入信儀礼において「語られたこと legomena、行われたこと dromena、見せられたこと deiknymena」の口外禁止であり、違反した場合は死罪とされた。それでも、公然と秘儀の内容を曝露したメロス島のディアゴラスといった人物も存在したが例外的であり、多くの入信者たちはタブーを固く守った²⁵。そのため、秘儀の具体的な内容について、その一部が異教攻撃の一環としてキリスト教護教的立場から書かれた史料から伝わるのみで、私たちに伝えられた情報は極めて少ない²⁶。史料の「沈黙」が、逆説的にエレウシス信仰の篤さを物語っているとも言えよう。基本的には大秘儀への参加によって入信儀礼は完結するが、翌年以降、再び入信儀礼に参加することでエポプテスという高位入信者となることができた。

b) 神官団

重要な決定は民会を通じてなされ、アルコン・バシレウスの管轄とされたが、実務者として特権的に祭儀の諸特権を握っていたのは、エウモルピダイ氏族（ゲノス）とケリュケス氏族という2つの宗教的名門だった²⁷。エウモルピダイは秘儀開示役〔ヒエロファンテス〕を、ケリュケスは祭列を先導する松明持ち〔ダイドウーコス〕の役を担い、彼らは入信料などの一部から役得を受けていた。ケリュケスはアテナイがエレウシスを統合した際に、アテナイ側の管理的要素として付け加えられたとされる²⁸。

c) 神聖休戦

古代ギリシア世界において大なり小なり戦争は恒常的なもので、「平和」とは各地で行われていた戦争の合間といった感があった。そうした中で、オリュンピア祭をはじめとするパンヘレニックな祭典に地中海から人々が蝶集する際には、旅路の安全確保が問題となる。そのため、こうした機会に主催国は、祭礼期間並びに参加者が往復に要するであろう前後の期間を神聖休戦と定め、その旨を告げる使者を事前に各地へ向けて派遣した。オリュンピア祭ではこの神聖休戦のことをエケケイリアと言い、神聖休戦を告げる使者は、テオロスと言った。更に、神聖休戦を告げる使節を迎えた諸ポリスは、祭典参加の公式使節団を派遣したが、彼らもテオロス（複・テオロイ）と呼ばれた²⁹。

アテナイもまたエレウシスの秘儀（小秘儀・大秘儀）挙行にあたってそれぞれ55日間の神聖休戦を発布した。エレウシスの秘儀の神聖休戦については、スpon daiという名称が用いられ、その休戦を告げる使者はスpon d' fo ro iと呼ばれた³⁰。この役目もエウモルピダイとケリュケスが占めていた³¹。この祭儀をパンヘレニックなものに高め、且つデロス同盟諸市を取り込むためのアテナイの国策的意図だと言われている³²。

d) 入信儀礼

実際の秘儀の再構成については、主に Clinton の説に従って述べることとする³³。

(1) 小秘儀—アンテステリオン月（2/3月頃）に行われた。アテナイ中心市南東部を流れるイリッソス川付近アグライの聖所（不詳）にて供犠と浄め、予備的入信儀礼が行われた。

(2) 大秘儀

- A. ボエドロミオン月（9/10月頃）14日：大秘儀の前日にエフェボスたちがエスコートして中心市に移送する。
- B. 15日：初日。アギュルモスと呼ばれる。ヒエロファンテスは、触れ役に大秘儀の開始を布告させる。供犠の執行。
- C. 16日：ハラデ・ミュスタイ。入信者たちはファレロンの海岸で供犠用の仔豚と共に沐浴を行う。
- D. 17日：エピダウリア。治癒神アスクレピオスが大秘儀に遅刻して中心市のエレウシニオンに到来したことに倣い、遅刻者を待ち受けるための予備日（前420年、大秘儀期間中にエピダウロスから勧請された同祭神像が中心市のエレウシニオンに到来³⁴）。2度目の供犠とアスクレピオスのための夜通しの祝祭 pannychis の開催。
- E. 18日：休息日（あるいは、この日にエピダウリア祭）
- F. 19日：エフェボイと神官団、役人団が聖秘物に随伴してエレウシスへ。
- G. 20日：イアッコス祭神像と共に入信者たちエレウシスへ行進³⁵。入信者と随伴者はミュルト（ギンバイカ）の冠を被り羊毛の撫糸を結び付けたミュルトの枝を携える祭礼衣裳を身に付けたとされる³⁶。途上、エレウシスから来たエフェボイたちと出会い、彼らに随伴されつつ残りの道中をエレウシスへ向かう。約20キロの道程を徒步で向かうことは、身体的にも精神的にも一定のストレスを強いる行為となるが、このことで失踪した娘を悲嘆に暮れながら探索するデメテルの行為を擬えるものとなっている。道程の半ばを過ぎたレイトイという場所（地図a）に差し掛かると、入信者たちはクロコシスの儀礼を受けた。これは、サフラン色のリボンを入信者の右手と左足に結びつけるというもので、ある種の魔除けのためだったらしい³⁷。この儀式までを日没前に行い、これ以降、入信者たちは松明を持って行進した（「ニンニオンの奉納陶板」参照）³⁸。
- H. 21日：日中は休息。夕方より秘儀が開始され、入信者たちはテレスティオニに入り秘儀の開示を受ける。初回入信者たちが去った後で、エポプタイには更に特別な光景が開示された。
- I. 22日：牛が犠牲獣として公式に捧げられるほか、入信者各々は、その他の犠牲獣、とりわけ豚をデメテルとコレーのために捧げた。この犠牲式は、神域の前庭で行われ、入信者と未入信の者一緒になって犠牲式を祝った。
- J. 23日：プレモコアイ。秘儀の最終日。プレモコエと呼ばれる容器2つに入れられた水が一方は西へ向け、もう一方は東に向かって地面へと空けられた³⁹。入信者たちはアテナイへ向けて帰国のため行進。翌24日には、中心市のエレウシニオンで評議会が開催されるのが習わしだった。

エレウシスの聖所から聖秘物を壯丁〔エフェボス〕たちがエスコートして中心市に移送する。



入信者たちの様子を描いた「ニンニオンの奉納陶板」©Marsyas (Wikimedia Commons)

VII. 「巡礼」としてのエレウシス秘儀入信

以上の概観を経て、エレウシスの秘儀の特徴として以下の4点を挙げることができよう。

- (1) 特定の期日に設定された2段階手続き

- (2) 中心市のエレウシニオンからエレウシスへの「聖道」ヒエラ・ホドスの行進
- (3) 開かれた入信資格
- (4) 個人の意思による任意加入と2回目の入信によって高位入信者となる反復的要素

では、「巡礼」という観点からこれらのそれぞれの特徴は、どのように評価できるであろうか。まず、第1点目の期日の指定であるが、これは冒頭に挙げたいわゆる古代ギリシアの「巡礼」4つのうちの一つオリュンピア祭などパンヘレニックな祭典への参加にも同様にあてはまる特徴である。「時間限定型」巡礼に相当する⁴⁰。ただ、特定の期日以外に当該聖地を訪問した場合に、「巡礼」対象外となるとすれば、聖所に辿り着くこと自体を目的とした「巡礼」(あるいは「隨時型」)に比して、当該の聖所で特定の祭祀に与ることを目的とする場合、主目的のための「手段としての移動」を「巡礼」と見做していることになるまいか。但し、この点に関しては2点目に挙げた「聖道」の行進という過程が、エレウシスの秘儀入信に「巡礼」としての資格を与えていたと見なすこともできるかもしれない(オリュンピア祭についても同様に祭典前日に58キロの「聖道」の行進というプロセスがあり同様のことが言える⁴¹)。しかしながら、古代ギリシア人自身は、この「聖道」の行進をまさに「祭列」(ポンペー *pompē*)という汎用的な語を用い、その他の「行進」と差異化を図ろうとしていなかった。「祭列」は、私的に行われる小規模な犠牲式から国家祭祀レベルまで祭祀を構成する共通の一要素であった。それ故、特定の祭祀活動についてこの部分だけをことさらに「巡礼」として強調するとすれば、古代ギリシア宗教そのものから見て偏向的な視点になりかねないという点に留意する必要がある。

入信資格の開放性について巡礼の類型を適用すれば、「開放型」巡礼となろう。確かに、性差や身分にこだわらない開放性が地中海中から入信希望者を惹きつけ、エレウシスが古代ギリシアの一大「巡礼」地に発展した要因として見なすことができるかもしれない。しかし、「巡礼」の代表格であるオリュンピア祭において、競技参加資格は男性に限られており、観客も未婚女性のみで、既婚女性は認められていなかった⁴²。とすれば、「巡礼」故に開放的であったわけではない。あるいは、この開放性を主催国アテナイの民主政とその精神の反映とみるべきだろうか⁴³。しかしながら、アテナイ民主政は、市民身分の成人男性が特権的に政治権力を独占していたのであり、女性や奴隸に参与の機会はなかった。このことを鑑みれば、秘儀の開放性をアテナイの「民主政」に求めるのは適当ではあるまい。むしろ、人間に等しく与えられた運命である「死」を直接的関心とする祭儀にあって、「男一女」や、「自由人—非自由人(奴隸)」という社会的性差(ジェンダー)や身分が捨象されたところにこの秘儀における開放性の所以を求めるべきではなかろうか。とすれば、いずれにせよ、この「開放性」は「巡礼」如何の特徴として狭義に評価されるべきものではないと思われる。

最後にエレウシスの秘儀入信の個人的性格については、どうだろうか。ギリシアの宗教は共同体的性格が強いとされる⁴⁴。また、誕生後に父親(家長)から自分の子供としての認可を受け、家の守り神である竈神(ヘスティア)に紹介された時点で、彼らの宗教生活は始まる。基本的には、「入る/入らない」の選択肢のない世界であった。そうした中にあって個人の意思選択で「入る/入らない」が任意とされていた点で、エレウシスの秘儀は例外的であったかに見える⁴⁵。

さらにエレウシスの秘儀ばかりでなく、古代ギリシアの代表的「巡礼」4つに、この個人的性格は共に認められよう。しかしながら、やはり、その個人ベースの入信儀礼を過度に「巡礼」的要素として強調することには留意が必要であると思われる。例えば、死に関わる祭祀としてエレウシスの秘儀と対にして参考されるものとしてオルフェウスの秘儀(オルフェウス教)がある⁴⁶。どちらも、ポリスの伝統的共同体祭祀とは一線を画す個人主体の信仰という側面をもちながら、対照的な歴史的展開を見せた。オルフェウスの秘儀には未だ実態を掴みにくいところもあるが、彼らは特定の神域・聖所を訪れたりするよりも、彼ら独自の神話体系に基づいて、身体から魂を解放するための実践に重きを置いていたように思われる。エレウシスの秘儀における個人主義的要素については、オルフェウスの秘儀と併せてポリス宗教の初期形成段階において派生した無視しえない傍流という観点を見落とすべきではない。ことさらに、その一方を「巡礼」要素として強



発掘された「聖道」跡（著者撮影）

調するとすれば方法論的にやはり偏向と言わざるを得ないのではないだろうか。

以上、エレウシスの秘儀の「巡礼」要素について私見を述べた。これはエレウシスの秘儀を巡礼研究で扱うこと自体を否定するものではないことを、改めて最後に述べておきたい。冒頭にも述べた如く、古代ギリシアの「宗教」は、その後の一神教たるキリスト教世界と本質的に異なる世界である。その点を捨象して「巡礼」的要素のみが抽出され比較研究の俎上に載せられることに対する懸念から、ギリシア人の世界観・宗教観に沿う形で、敢えて非「巡礼」的要素を留意点として指摘した。緩やかな包括的概念の適用が、却って硬直的で皮相的な理解に留まる可能性を危惧する。こうした検証手続きが、古代ギリシアの「巡礼」のみならず、ひいては巡礼研究全体に資するささやかな一歩となることを願って稿を閉じたい。

註 初出以降は、著者と年号で示す。

- 1 馬場恵二『癒しの民間信仰—ギリシアの古代と現代』東洋書林, 2006; 山川廣司「古代ギリシアのエピダウロス巡礼—アスクレピオスの治療祭儀」(四国遍路と世界の巡礼研究会編)『四国遍路と世界の巡礼』法藏館, 2007, 186-198 参照。
- 2 Cf. M. Dillon, *Pilgrims and Pilgrimage in Ancient Greece*, London and N.Y., 1997.
- 3 例えは、Dillon 1997, J. Elsner and I. Rutherford (eds.), *Pilgrimage in Graeco-Roman and Early Christian Antiquity: Seeing the Gods*, Oxford, 2005 (repr. 2010) 所収の諸論考、公的使節テオロスに関する I. Rutherford, *State Pilgrims and Sacred Observers in Ancient Greece : A Study of Theoria and Theoroi*, 2013, Cambridge のほか、考古学的見地を取り入れた論集 T. M. Kristensen and W. Friese (eds.) *Excavating Pilgrimage: Archaeological Approaches to Sacred Travel and Movement in the Ancient World*, London and N.Y., 2017 がある。
- 4 ここでは、"pilgrimage" の定義の問題を前提とする。邦訳語としての「巡礼」の定義、その二義性については、小嶋博巳「遍路と巡礼」(四国遍路と世界の巡礼研究会編) 2007, 11-27 参照。
- 5 Dillon 1997, xviii.
- 6 polytheia の語はアレクサンドリアのフィロンによって初めて使用されたとされる。cf. I. Polynskaya, *A Local History of Greek Polytheism: Gods, People and the Land of Aigina, 800-400 BCE*, Leiden and Boston, 2013, 5 n. 8. cf. S. Price, *Religions of the Ancient Greeks*, Cambridge, 1999, 11.
- 7 Cf. 桜井万里子「エレウシスの秘儀とオルフェウスの秘儀」(深沢克己・桜井編)『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』東京大学出版会, 2010, 33.
- 8 J. Kindt, *Rethinking Greek Religion*, Cambridge, 2012, 53.
- 9 S. Scullion, 'Pilgrimage' and Greek Religion: Sacred and Secular in the Pagan Polis, in Elsner and Rutherford (eds.) 2005, 111-130.
- 10 地中海世界における一神教的巡礼の概観については、関哲行「序」(歴史学研究会編)『巡礼と民衆信仰(地中海世界史4)』青木書店, 1999, 17-34 ならびに、同書所収の渡邊晶美「巡礼総論—奇跡、聖者、聖遺物、そして巡礼」36-62 参照。
- 11 エレウシスの神域の考古学的調査については、高橋裕子「ポリス成立期のエレウシスとアッティカ」『史苑』(立教大学) 57(1), 1996, 50-71; 周藤芳幸・澤田典子『古代ギリシア遺跡事典』東京堂出版, 2004, 91-88; 山川廣司「ミュケナイ時代の宗教(2) 王宮の聖所を中心に」『愛媛大学法文学部論叢(人文学科編)』26, 2009, 2-3; M. B. Cosmpoulos, *Bronze Age Eleusis and the Origins of the Eleusinian Mysteries*, Cambridge, 2015 参照。
- 12 高橋 1996 は、考古学的立場から前8世紀にエレウシスはアッティカに併合されたとの見解を示す。これに対し、Ch. Sourvinou-Inwood, Festival and Mysteries: Aspects of the Eleusinian Cult, in M. B. Cosmpoulos (ed.), *Greek Mysteries: The Archaeology and Ritual of Ancient Greek Secret Cults*, London and N.Y., 2003, 25-49 は、エレウシスは当初からアテナイの一部を為しており、後代に併合されたものではないと主張している。
- 13 Cf. 篠塚千恵子『死者を記念する—古代ギリシアの墓辺図研究—』中央公論美術出版, 2017, 63.
- 14 J.Travlos, *Bildlexikon zur Topographie des Antiken Attika*, Tübingen, 1988, 198.
- 15 Cf. 桜井万里子「エレウシスの秘儀とポリス市民」『史境』8, 1984, 31.

- 16 Cf. 桜井万里子『古代ギリシア社会史研究—宗教・女性・他者—』岩波書店, 1996, 39, 52.
- 17 「空虚な影」*Soph. Aj.* 126. 死後の世界については、*Od.* 471-491; 本村凌二『多神教と一神教』岩波書店, 2005, 110-138; R・ガーランド（高木正朗・永都軍三・田中誠 訳）『古代ギリシア人と死』晃洋書房, 2008 参照。
- 18 ホメーロス（沓掛良彦訳）『ホメーロスの諸神讃歌』筑摩書房, 2004(初版1990, 平凡社)より借用。「デメテル讃歌」について、同書「訳注」と「解題」、逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話—『ホメーロス讃歌』より』岩波書店、1985収録の「訳註」と「解説」参照。
- 19 高津春繁訳（『ギリシア喜劇IIアリストパネス（下）』筑摩書房, 1986 [1964]）所収より借用。
- 20 娘不在の季節を夏とする見解もある。ホメーロス（沓掛訳）2004, 92-94; 逸身・片山 1985, 236 参照。
- 21 *IG I³* 78. 桜井 2010, 47 は、この碑文の年代を前421年春と推定している。
- 22 Price 1999, 102.
- 23 G. E. Mylonas. *Eleusis and Eleusinian Mysteries*, Princeton, N.J., 1961 (repr. 2016), 237.
- 24 Cosmopoulos 2015, 17.
- 25 メロス島のディアゴラスと死罪の適用の問題については、桜井 2010, 48-49 参照。
- 26 例えば、アレクサンドリアのクレメンス（後2世紀）。
- 27 Cosmopoulos 2015, 16.
- 28 Cf. 桜井 1996, 67, 81-82 (註11).
- 29 桜井 1984, 32-33; Dillon 1997, 1. 尚、テオロスのネットワークを総合的に論じたものとして、Rutherford, 2013; イアン・ラザフォード（竹尾美里訳）「ネットワーク理論と神聖使節団テオリアのネットワーク」及び「訳者解説」（浦野聰 編）『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版, 2017, 141-170 参照。
- 30 Cf. 桜井 1996, 30-37.
- 31 Dillon 1997, 6.
- 32 Cf. 桜井 1984, 32-34; 桜井 1996, 41.
- 33 K. Clinton, The Sanctuary of Demeter and Kore at Eleusis, in N. Marinatos and R. Hagg (eds.) *Greek Sanctuaries: New Approaches*, London and N.Y., 1993, 116-120.
- 34 アテナイへのアスクレピオス勧請に関しては、齋藤貴弘「紀元前5世紀後半のアテナイにおける宗教と民衆—アスクレピオス祭儀の導入を中心にして—」『史学雑誌』106-12, 1997, 35-59 及び馬場 2006, 第5章 (237-279) 参照。
- 35 祭列の発する叫び声(*Ar. Ran.* 325)の神格化とされる。cf. 桜井 1996, 54; K. Clinton, *Myth and Cult: The Iconography of the Eleusinian Mysteries*, Stockholm, 1992, 64-71; Hdt.8.65.
- 36 Cosmopoulos 2015, 18. cf. *Ar. Ran.* 328-330.
- 37 Mylonas 1961, 256; Cosmopoulos 2015, 19.
- 38 前422/1年の民会決議 (*IG I³* 79)によれば石材で橋を架げること、聖秘物を安全に運べるように橋は5ブース(1.5メートル弱)の幅とする旨、定められている。この橋の幅の設定は荷馬車が通れないようにし、祭列が徒歩で神域に入るようにするためであった。
- 39 Cf. Miles 1998, 95-103.
- 40 巡礼の類型については、小嶋 2007, 16 に挙げられた3分類・6類型に従った。
- 41 (桜井万里子・橋場 弦編)『古代オリンピック』岩波書店, 2004, 88; Paus. 5.25.7.
- 42 (桜井・橋場編) 2004, 93.
- 43 桜井 1984, 34 は、これとはやや異なる形で、商工業に従事する多くの在留外国人や奴隸を抱えていたアテナイ共同体の特徴との関わりを示唆している。
- 44 桜井 2010, 34.
- 45 桜井 2010, 48 は、エレウシスの秘儀の備える公（共同体）と私（個人）の二面性を指摘している。cf. Sourvinou-Inwood 2003.
- 46 Cf. 本村 2005, 131-138; 桜井 2010.